

伝えています。皆さんのところ

前回は災害時の注意点を特集しました。正直、発行したときは今更必要ないかな、と思いましたが、とんでもなかったですね。まだ強い余震が続いています。不安な状況下で生活をされている被災地の方々の心労を思うと堪りません。本当にお見舞い申し上げます。当店も現在ハローワークに震災被災者求人を掲出し、仕事と住居の提供を申し出ております。しかし、現地ではボードに求人を張り出すのがやっとのことだそうで未だ採用には至っておりません。引き続き募集活動をしていく所存です。

私たちは販売店といえどもジャーナリズムの一端を担う者として常に各発行本社に地域の情報をアップしております。今回の震災において伝え続けている情報は、用賀の「田舎のごつつお」とそれに関わる用賀商店街、用賀地域の活動状況です。私たちが伝えた情報がニュースバリュー有りと判断され発行各本社の記者が取材し各紙面に掲載されました。今回はその特集です。



朝日新聞

弊社は、3月11日直後から「田舎のごつつお」の状況や、震災に対しての商店街・町会の取り組みを朝日新聞本社担当記者に逐次報告。商店街関係者の陸前高田訪問も本社の素早い対応で記事にすることができました。

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市を支援しようと、同市のアンテナショップがある世田谷の用賀商店街振興組合のメンバーが13日、市災害対策本部で戸羽太市長に寄付金320万円を手渡した。

がんばろう!
～首都圏から

訪れたのは、小林弘忠理事長(56)ら9人。12日早朝に用賀を発ち、車で約10時間かけてたどり着いた。



戸羽太市長(左)に寄付金を手渡す
小林弘忠理事長＝岩手県陸前高田市

商店街での募金や、チャリティーバザーなどで約470万円を集めた。日本赤十字社に150万円を託

し、残り全額を持参。「商業振興に役立ててくださ」と言い添えて渡した。戸羽市長は「10年、20年

「田舎のごつつお」の村上優希店長(30)は同市気仙地区出身。津波で実家が流され、避難した家族とは約3週間会えなかった。4日から地元で過ごし、漬物などを仕入れて回った。「被災地を元気づけるため、少しでも地元の産品を東京のお客さんに届けたい」(山西厚)

用賀ですっかり馴染みになった陸前高田市のアンテナショップ「田舎のごつつお」。その店頭にはかつていい匂いを漂わせていた「ホタテ」をはじめとする海産物の姿はありません。そして、これからしばらくは陸前高田の海産物を食す機会は難しそうです。こんなことならもっとホタテやサンマを食べておけば良かったと後悔しています。残念!大震災直後はまだストックがあったようですが、今の状況を予見された熱心な「ごつつおファン」の方々が次々と訪れ励ましの言葉とともに商品を購入してくださりあっという間に売り切れたそうです。

用賀商店街↓陸前高田「商業振興に」320万円寄付

3月29日

朝日新聞朝刊

4月14日

朝日新聞朝刊

商店街が支え、募金も

陸前高田市の「田舎のごつつお」 世田谷区

津波で壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市のアンテナショップ「田舎のごつつお」が、世田谷の用賀商店街で営業を続けている。昆布や切り干し大根など残っていた同市の特産品もほぼ尽きたため、急ぎ北海道や長崎の特産品を仕入れ、商品棚を埋めている。

用賀商店街振興組合の小林弘忠理事長(56)は「復興までには長期間かかる。店を開き続け、募金を集めて少しでも支援をしたい」と話す。09年11月にオープンした同店は商店街の直営。前年の岩手・宮城内陸地震への支援をきっかけに岩手県と交流が生まれ、魚介類を扱う店がなかった商店街に海の幸が豊富な同市のアンテナショップが開かれた。



「田舎のごつつお」を支援する小林弘忠理事長＝世田谷区の用賀商店街

社屋は津波で流された。同市出身の女性店長は仕事で回っていた岩手県内で被災。いったん都内に戻ったが、親友の安否が不明のため、現地に

という。店長の不在の間は、パートや商店街からの手伝いで支えている。店の表には陸前高田市の美しい海岸の大看板が掲げられている。小林理事長は「震災後、最初に『壊滅的』と報道されたのが陸前高田。この景色も無くなってしまった。復興まで息の長い支援をしていきたい」という。

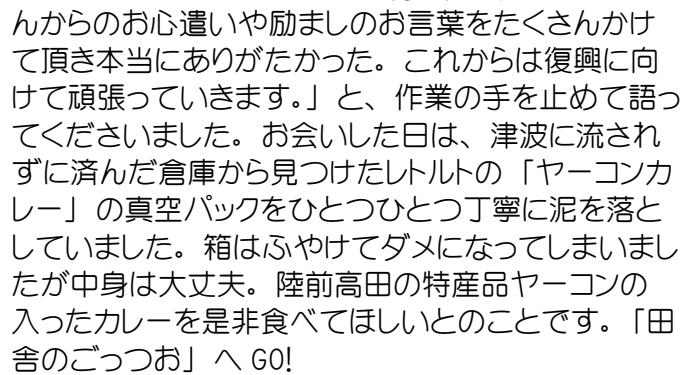
募金も始めた。商店街の約260店舗のうち約150店舗が募金箱を置いた。大学生らが商店街のマスコットの着ぐるみ姿で街頭に立ち、募金を呼びかけることもある。(有吉由香)

* いろはに刀サッチ#27「な」* ～泣きっ面に蜂～

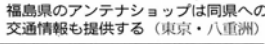
「な」は、江戸では「泣きっ面に蜂」で、苦痛で泣いているところへ、更に蜂がやってきて苦痛を与えるということから、苦痛・不幸・不運といった悪い状況の中、更に悪いことが起きるさまを表す言葉。大阪では「習わぬ経は読めぬ」で、学んだことのないことは、やれと言われてもできるものではないということ。京都では「済す時の閻魔顔」で、他人から金品を借りるときはにこにこしているが、返済するときには渋い顔をするという意味。いますよね、こんな人。貸してる方が遠慮しちゃうたりしてね・・・



先日、用賀商店街事務所の前で「田舎のごっつお」の村上店長さんにお会いしました。村上店長さんは「皆さ



被災地支援の窓口



東北地方の名産品を扱う
東京都内のアンテナショップ
が、古里の被災地支援に
奮闘している。商店街と一
緒に募金活動をしたり、店
頭で被災者の安否情報を提
供したり。商品の入荷は滞
りがちで店内の棚は空きが
目立つが、「被災地を応援
する窓口になりたい」と意
気込んでいる。

岩手県陸前高田市の海産

物などを「東京東武百貨」に買取った。東京東武百貨は、地震発生後すぐに義援金の募集を始めた。この店は3年前の岩手・宮城内陸は震災の復興イベントをきっかけに、市側と用賀商店街が協力してオープン。今街は商店街の約150店舗も参加し、義援金100万円以上が集まった。店長は「陸前高田市の実家が津波で流されたなど、出費が難しい。用賀商店街振興組合の小林弘忠理事長は「陸前高田市は商店街の仲間。支援は惜しみない」と話す。中央区銀座にある岩手県のアテナショップ「いわ

て銀河フニザ」は、奥から最新の避難者名簿や被災情報を印刷し、閲覧できるようにした。ボランティア希望者には問い合わせ先も紹介。豊島区東池袋にある宮城県の「宮城ふるさとアラサ」も義援金を募り、これまでに1000万円以上が集まったという。

東京駅前の「福島県八重田観光交流館」は店内の一角に、避難所の連絡先や交通情報をもとめた資料、地元の新聞を読めるスペースを設けた。商品は普段の2割程度しかないが、知人らの安否を確認したいと訪れる人が後を絶たない。いわ

[illegible][illegible]

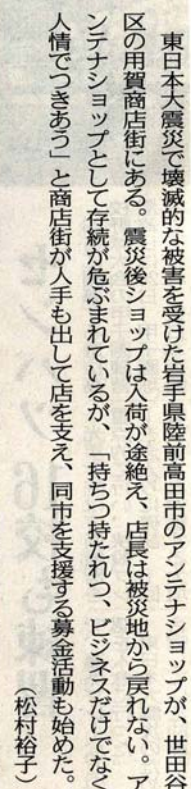
東京新聞

今できること
——被災地とともに——

東京の地元紙「東京新聞」の「今できることー被災地とともにー」に用賀商店街と「田舎のごっつお」の関係や震災後の用賀地域の取り組みやイベントの記事が掲載されました。「田舎のごっつお」を支えていくことも復興のお手伝いのひとつになると思います。

陸前高田 幸を再び

用賀商店街で募金 アンテナショップの縁



け。商店街では、急ぎよ北海道や九州からほかの商品を取り寄せ、品数をそろえた。店長が不在な分、商店街が応援して店番に当たっている。

募金活動は、商店街の約百六十店に募金箱を設置して実施中。二十日は、地元の大學生も協力し、商店街のキヤラクターと一緒に東急用賀駅前で支援を呼び掛けた。来月二、三日に予定した春の活性化イベントをチャリティーに変え、屋台などの収益も含め寄付する。

小林弘忠理事長（五七）は「陸前高田は商店街の一員。復興するまで、店は残しておく。支援を続けていきたい」と話し、「陸前高田」の看板を掲げたまま店を守っていく考えだ。

3月21日

東京新聞朝刊

4月3日

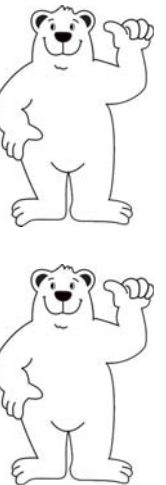
東京新聞朝刊

用賀の元気被災地へ

東日本大震災で被災した岩手県陸前高田市のアンテナショップが支援チャリティーイベント



チャリティーに模様替えして開かれたイベント＝世田谷区で



それ行け!!
アサッチ

